

私の眼に映った野口先生

桜井陽二

とにかく明るい人だった。えんじのスーツに蝶ネクタイ。その上に、ふっくらと、色白で、血色の良い、いつも陽気に冗談をとばしている、野口先生のお顔が乗っていた。

1960年代。私がまだ学生だったころ。大学の雰囲気は、決して明るくはなかった。発展の軌道に乗り、社会・経済の変動が著しい社会の常か。生活改善のチャンスの拡大が進学率を高めるにつれ、逆説的に、社会の矛盾は強く意識され、貧困をバネとする哲学が影響力を揮う。そんな時代だったように思う。

そんな中で、野口先生は、京の町衆の心意気か、サンサシヨンの美学で、異彩を放っておられた。私が教員として就任したころも、よく皮膚感覚を讚美する話で、意気投合したものだった。

「ランボーの感覚にまさるものがありますか?」「そうよ。皮膚感覚よ、桜井さん!」こんな調子だった。

先生の生き方のスタイルは、先生の体質的なものからくるものであったと同時に、ドブネズミ服の、まじめで、野暮天のインテリに対する、先生のせいっぱいのレジスタンスだったのではあるまいか。

私は、芸術も文学も解しない野暮天の一人である。その上、野口先生とは、身近かに一緒に仕事をするチャンスも、生活することも、なかったから、先生の全体像を描くことなど、とてもできるものではない。だが、野口先生とご一緒する機会があると、先生のお人柄につられて、口の重い私でも、不思議なくらい、つい、おしゃべりになっていた自分を思い出す。モーパッサンのゆううつな甘美について。宣長の『玉勝間』について。……等々、私の一知半解の話題にも、調子をあわせて下さるのであった。そうした機会を重ねる度に、プランメル以上に調節を身につけた野口先生の魅力を感じさせられ

たものである。

入学試験期には、野口先生のまわりは、社交場と化すのが常であった。ホストの野口先生は、まず自分がバカになり、社交場の触媒となる。そして、次第に、深刻かつ真剣な話題へと、われわれを誘い、ほどよいところで、潤滑油の役割を果たされ、われわれに、教養と、交際と、疲労回復の喜びとを、与えて下さった。

野口先生の在外研究のテーマは、「美の探求」であったと記憶している。私には、その方面について語る資格はない。だが、先生の探し求めておられたのは、そのみではなかったように思われる。美と愛と真への憧れが、先生を、休むことも、終わることもない探求の道に踏み込ませたのではなかろうか。そうして世界を経めぐり、最近、日本に回帰されたところがおありのように見受けられた。

この点を、少し詳しくお聞きしたいところであった。が、韜晦されたまじめさが、軽やかさの蔭でやすむことのなかった探求が、その細やかすぎる神経を酷使させ、肉体に復讐したということは、なかっただろうか。

先生は、お体を悪くされ、次元を異にする世界へとゆかれた。しかし、だからといって、先生と私どもとの対話が、これで終わったわけではないじゃないですか。ねえ、野口サン！